西南学院大学文学研究科博士学位申請論文審査報告書

主査　川瀬 義清

副査　伊藤 彰浩

副査　大橋　浩

学位申請者　　長　加奈子

論 文 題 目　　『認知言語学を英語教育に生かす』

審査の経過

長加奈子氏の学位請求論文は，2016 年 7 月 4 日に受理された後，外部審査委員を含む 3 名の審査委員による予備審査を経て，2016 年 11 月 22 日に最終試験（公開）を実施した。最終試験では，審査委員 3 名，大学院生 3 名が出席して，長氏による論文の概要説明，口述試問がおこなわれた。

論文の概要

本論文は，近年著しい発展を遂げてきた認知言語学の知見を，英語教育の現場へどのように応用するかを実証的に研究したものである。本論文は 5 章で構成されており，第 1 章が序論，第 2 章が認知言語学の言語観を概観し，第 3 章，第 4 章が本論文の中核となる実証的研究となっている。最後の第 5 章では，全体のまとめとともに，今後の研究の方向性について述べている。以下，その概要を見る。

第 1 章は，研究の背景及び目的について述べたものである。これまで様々な言語理論が提唱されてきたが，その成果は必ずしも英語教育の現場に十分生かされていないことを指摘し，認知言語学の教育現場への応用の可能性について述べている。

第 2 章は，まず，認知言語学以前の近代言語学の外国語教育への影響をまとめ，続いて認知言語学，特に Langacker の認知文法の枠組みを中心とした言語観について概観し，第 3 章，第 4 章の実証的研究のための理論的基盤となる概念を導入する。

認知文法では，言語は認知主体である人間の認知能力を反映しているものとしてとらえ，言語現象に現れた認知能力を説明する道具立てとして，ベースとプロファイル，図

と地，トラジェクターとランドマーク，心的走査と参照点の関係，抽象化とカテゴリー化を取り上げ説明し，認知文法の基盤となる，言語を具体的な発話の場における使用に重きを置く用法基盤モデルについて言及する。続いて，認知文法におけるプロファイルの観点からの品詞分類を概観し，本論文で取り扱う前置詞に対するイメージスキーマアプローチを紹介する。最後に，このような認知的な観点から，人間が出来事を言語化する時に母語により事態把握の違いから概念構造が異なってくるという観点にたち，第二言語習得をとらえることを提案する。

続く第3章，第4章は本論文の中核をなす部分である。第3章では，統計手法を用いて，英語話者，日本語話者，中国語話者の英語の前置詞 in の概念構造のずれを明らかにしている。

まず，第1節で，Bowerman and Choi や池上・守屋などの先行研究をもとに，母語により意味カテゴリー（概念化）に違いがあることを示し，続く第2節，第3節で，調査により得られたデータを用いて英語前置詞 in の母語による概念構造の違いを実証的に明らかにする。調査では，参加者に英語前置詞 in を用いた文を20文与え，前置詞の意味に着目し任意の数のグループに分けさせる。その結果を多次元尺度法を用いて分析し，そこで得られた座標点をもとにクラスター分析をおこなっている。分析の結果，英語話者，日本語話者，中国語話者いずれも，空間用法，時間用法，比喩用法の3つのクラスターが存在することが分かった。3つのクラスターが存在することでは同じであるが，母語の違いにより，それぞれの用法の下位分類に違いが見られた。この結果を受け，外国語学習では，母語話者と学習者の間に見られる概念構造のずれを修正するような指導が必要であることを主張する。

第4章では，第2章で見た認知言語学の知見を生かし，英語母語話者と日本人英語学習者の概念構造のずれを埋めるような前置詞学習の教授法，教材の開発をおこない，その教育効果について検証している。

第1節では，英語の前置詞とそれに対応する日本語の助詞を用いた表現との対応関係を分析する。続いて第2節では，英語の様々な用法を持つ前置詞 in, on, at の中心義としてセントラルイメージスキーマ（CIS）を設定し，認知言語学の知見に基づいた教材を作成している。学習者を，この教材を用いた学習グループと従来型の意味を中心に教える学習グループに分け前置詞の指導をおこない，事前テスト，事後テストを実施している。第3節では，第2節で得られた結果に対し多変量解析をおこない教育効果を分析する。その結果，認知言語学の知見に基づいた学習をおこなったグループにおいて，位相用法と機能用法において統計的に有意な教育効果を示したことが報告されている。さら

に，事前テストと事後テストの結果に対しクラスター分析をおこない，クラスタリングに変化のあった項目を精査し，CIS のランドマークに対する認知操作の複雑さの度合いにより，教育効果に差があることを明らかにした。

第 5 章では，研究の総括と外国語教育への示唆，今後の課題について述べている。認知言語学の知見を外国語教育に生かす研究は，ようやく緒についたばかりであり，本論文でおこなった様なアプローチを積み重ね，よりよい英語教育へと結びつけていく必要性を述べている。

論文の評価

本論文は，認知言語学の知見を英語教育にどのように生かすことができるかを探求したもので，長氏のこれまでの多くの研究に裏付けされた，理論と実践のバランスが高い水準で保たれた論文として仕上がっている。

論文の前半では，後半の実証研究に必要な認知言語学の理論が簡潔にまとめられている。多少簡潔すぎるきらいもあるが，本論文の対象として言語研究者だけでなく現場の教師も想定しているためであると考えられる。現場の教師は文法理論の専門家というわけではなく，難しい理論をそのまま提示されても現場に応用することは難しい。ここでは，後半の第3章，第4章における分析に必要な背景的議論は過不足なくおこなわれており，現場の教師にとっては認知言語学の入門的な紹介としても有益なものになっている。

第3章は，母語による意味カテゴリーの違いを，データを基に実証的に明らかにしている。本章の特徴は，英語母語話者と日本人英語学習者を比べるだけでなく，中国人英語学習者も加えて分析した点である。これにより，母語により意味カテゴリーが異なるという長氏の主張により強い根拠を与えている。

第4章では，認知言語学の知見を生かした教授法の開発とそれを用いた教育効果の測定がおこなわれている。本章での議論の優れた点は，従来，空間用法としてひとまとめにされていたものを，日本語では位相用法と機能用法の2つに分けられることを明らかにし，それに基づいた教授法を開発し教育効果を測定したことである。また，教育効果の現れた項目と，あまりなかった項目の違いについて，認知操作の複雑さという観点からの説明を試みている。この認知操作の複雑さの解明が進めば，新たな教授法の開発につながる大きな可能性を秘めている。

審査委員から指摘された問題として，本論文で用いられたいくつかの用語の定義のあいまいさがある。一部の用語の定義が明確ではないため，誤解が生じる可能性があり，今後改善する必要がある。また，最終試験の中で，教育効果の測定に関するデータ収集

のあり方について長氏と審査委員の間で意見がかわされたが，これは研究のあり方として幅広く検討していかなければならない課題であろう。

今回の長氏の論文は，前置詞の一部のみを扱ったものであるが，長氏も述べているように，様々な言語現象に対し認知言語学の知見を生かしたアプローチが可能である。本論文は，今後の文法教育に対する一つの方向性を示した優れた論文と言える。

以上のように，学位請求論文の内容，最終試験における応答などから総合的に判断した結果，審査委員全員一致で，この研究が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。